

「郷土を歩こう！！～白糸地区歴史編～」を歩くコース

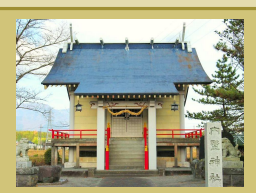
明治22年(1889)、内野村・原村・半野村・佐折村・狩宿村が合併し、白糸村となった。白糸地区は旧白糸村域にあたる。地域内には富士山の湧水を水源とする芝川と、芝川を水源とする用水路が流れ、これらは水源の乏しい地域の生活を支え、産業発展をもたらした。またこの地域には、「鬼のいない村」や「おめん淵」、「炭焼き長者」などの昔話や江戸時代から続く民俗行事「火伏念仏」も伝わる。



①神代杉



②上野住還



③内野神社



④法蔵院



⑤鬼のいない村



⑥天子山地



⑦北山用水取り入れ口



⑧白糸発電所



⑪原用水



⑩三極栽培記念碑



⑨芝山浅間神社

マーク凡例

- 観察ポイント ●
- トイレ ☒
- 駐車場 P
- 寺院 卍
- 神社 卍
- 石造物 卍
- しずおか遺産 遺
- ルート —

遺



ーコースのみどころー

①神代杉(白糸会館内)

「神代杉」とは、杉の木が何かの原因で地中に埋まり、半分、化石になったもので、白糸会館内にあるのは昭和61年(1986)12月、佐折の白糸財産区有林から発掘された樹齢約600年のもの。神代杉は田貫湖からも掘り出されており、明治時代に掘り出された直径2mの神代杉は、日本楽器(現ヤマハ楽器)が購入している。

②上野往還(白糸大宮往還)

明治26年(1893)、大宮町-上井出村間の道路が改修され流通が発展すると、その恩恵を受けられない村々が道路の改修を望んだ。その結果、明治34年(1901)、大宮町を経て富丘・上野村を経て白糸村内野へ至るこの道が開削された。道筋はおおむね現県道184号と重なる。

③内野神社

内野地域の5つの神社を合祀して昭和46年(1971)に創建された。境内の灯笼や幟杭に旧神社名を知ることができる。この地域には、過去に発生した大火からの復興と火災から逃れることを願って始まったという「火伏念仏」(市指定無形民俗文化財)が伝承されている。

④法蔵院

寺伝によれば、最澄(伝教大師)が富士登山に赴く最中、村人に授けた地藏菩薩を、村人が御堂を建てて祀ったのが始まりだという。また寺の宝物として、最澄が彫刻した弁財天像が伝わる。内野地域では盆時期の8月16日に、先祖供養と水難者の供養のため、造り物(カワカンジ)に火を付けて芝川へ流す行事を行うが、流す前に法蔵院住職による施餓鬼の法要と念仏講(六齋衆)による送り念仏が行われる。

⑤鬼のいない村

この辺りは昔話「鬼のいない村」の舞台である。「鬼橋」は富士山麓に住む悪い鬼が鉄砲で撃たれた場所であり、「足形」は獺師に撃たれた鬼の足跡がついた場所であるという。この足形とは、水の作用により小石が川底の岩をえぐって作ったくぼみ(ポットホール)である。なお鬼は住処に帰る途中、寺の和尚から薬だと言ってもらった火薬と、温めるためにもらった火打石で爆散した。以来、この地域には鬼がいなくなったという。

⑥天子山地

内野発電所の西にそびえる山。富士山の裾野と富士川の間立ち、山梨県南部から静岡県北部にまたがる。ここには、炭焼長者(貧しい炭焼き男と都の姫が結婚し長者となる)伝承や、瓔珞ツツジ伝承、雨乞い伝承などがある。

⑦北山用水取り入れ口

天正10年(1582)、徳川家康の家臣により開削されたと伝わる。上井出・北山を経て、山宮用水・万野用水に接続する。水源が乏しく雨水に頼って生活していた多くの北部地域の人々にとって芝川は生命線であり、江戸時代以降、芝川を水源とする多くの用水路が開削された。

⑧白糸発電所取水口・水槽・発電所本館(西から)

芝川の水を利用した水力発電所の1つで、大正5年(1916)に発電を開始した。近隣の猪之頭・足形・内野・狝宿にも同様の発電所があり、これらは明治41年(1908)から大正8年(1919)にかけて建設され、旧富士製紙(株)の工場動力源として利用された。発電所建設にあたり、芝川の水利権を巡って、旧富士製紙(株)派や山梨県の実業家を中心とする派閥、地域の有力者を中心とする派閥などが激しく対立したが、最終的にはこれらの派閥が統合された富士水電(株)が設立されることとなった。

⑨芝山浅間神社

昭和17年(1942)、近代戦の中核である機甲部隊の拡充強化のため、少年たちの育成を目的とする陸軍少年戦車兵学校が上井出地区に開校した。人穴地区は演習場となったため、住民の多くは芝山に強制移住となり、人穴浅間神社も遷された。境内には富士講信者の名前がある石灯笼も移されている。

⑩三椏栽培記念碑

石碑は昭和28年(1953)、大蔵省印刷局(現独立行政法人国立印刷局)が協力し、全国局(庁)納みつまた生産協力会が主体となって、静岡三椏栽培の発祥の地として設置されたもの。この地域は江戸時代から三椏の生産が盛んに行われ、明治時代には大蔵省が紙幣原料として採用したことで生産過剰となった。この状況に対し白糸村の渡辺登三郎は、三椏の販路拡大のため、機械製紙工場創立に奔走した。登三郎の計画は実現しなかったが、その行動は鷹岡村(現富士市入山瀬)への旧富士製紙(株)の工場誘致へ結びつくことになった。

⑪原用水

芝川の支流 原川を水源とする旧原村の灌漑用水。この用水は、白糸発電所の取水の影響を大きく受けることから、富士水電(株)は特に配慮をしていたようである。しかし『静岡民友新聞』によれば、大正10年(1921)は晴天続きで芝川の流量が減少したことで、原用水に不足が生じたため、白糸発電所の使用水量の制限と用水の不足の補填を求め、原村民が発電所事務所へ押しかける騒動が発生している。